

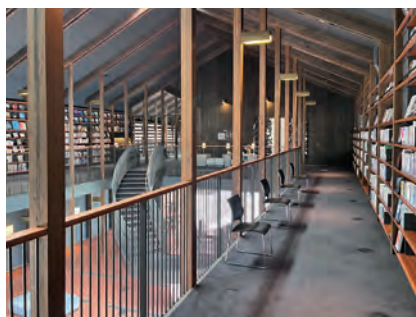
生まれ変わった駅前から、
忍びと信仰の里をたどる

伊賀市「新堂」駅周辺

JR関西本線「新堂」駅は、大正10（1921）年に開業した伊賀市北部の玄関口。江戸時代前期に伊賀・甲賀の忍術を大成した忍術秘伝書『萬川集海』に登場する十一人の忍者の一人「新堂ノ小太郎」の伝承地としても知られています。小太郎の姓は金藤といい、佐那具の城に忍び込んだ際に見つかってしまい、井戸に石を投げ込んで逃げたという逸話も伝わります。近年、駅前の「SHINDO YARDS」には図書館や市役所支所、銀行が整い、地域の新たな交流拠点として生まれ変わりました。今回はこの新堂駅を起点に、人々の出会いを育む図書館や信仰を集める高台の社、水運で栄えた荘園の井戸、そして地元の造り酒屋までを巡る、家族連れにもおすすめの散策コースをご紹介します。 取材・文：杉本友美



図書館「BOOKMARK STORAGE」



館内は吹き抜けで開放的



神明神社



神明神社から新堂一帯を眺める

「SHINDO YARDS」から 神明神社、佐々木氏城跡へ

今回の散策のスタートは、JR「新堂」駅前に広がる「SHINDO YARDS」。地元企業「DMG森精機」による地域貢献の一環として、企業・市・地域が協定を結び整備されました。図書館「BOOKMARK STORAGE」は、地元のスギを使用した落ち着いた漆黒の外壁に開放的な空間、カフェも併設されています。電車を待つ間にくつろぐ人や、休日には家族連れも。「子どもたちが夏休み

に勉強したり、待ち合わせに使ったり憩いの場になっています」と奥澤さん。図書館を出て駅の北側から住宅地の細い坂道、細い参道を上りきると、神明神社に到着です。同社は、新堂・楯岡・柏野にある神社を明治41（1908）年に合祀したもので、天照大神をはじめ13柱の神々が祀られています。小高い場所にあるため、境内からは新堂の田園風景や工場群などを見渡せて、夏には花火大会を眺める人で賑わうそうです。

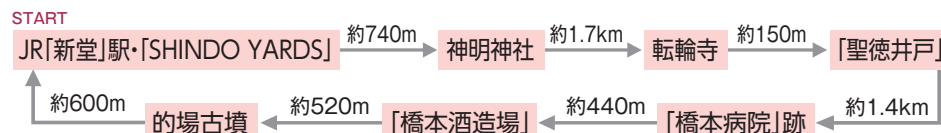
神明神社近くに広がる鎮守の森が、近江の佐々木氏にゆかりを持つとされる。江の佐々木氏にゆかりを持つとされる。佐々木氏城跡。私有地のため立ち入りはできませんが、鳥居付近からその森を臨むことができます。一部、堀や土塁が今も残るといい、「弓の稽古で矢を放った先が、駅の南に見えるあの的場古墳なのです」と教えていただきました。奈良の興福寺一条院から還俗し15代将軍となった足利義昭が、甲賀へ向かう途中にこの城に立ち寄ったという説も伝わります。『富治林家由緒書』には、近江の六角義賢が湯舟から新堂を訪れた際、郷土に「佐々木」の名字を許したという記述も残されており、近江との深いつな



今回ご案内いただいたのは、「西柘植地域まちづくり協議会」の代表、奥澤 重久さんです。地域への熱い想いが伝わる楽しいお話を交えつつ、足取りも軽く進みました。



■ 行程図 所要時間／約2時間30分 ※所要時間は、おおよその目安です。





転輪寺の入口



転輪寺を見守る七本松



古くからこの地を潤してきた「聖徳井戸」



「聖徳井戸」近くに広がる田園

がりを物語っています。

柏野の里に伝わる松と水の物語

神社を出て坂を下り、柏野方面へ1.7キロメートルほど歩くと、転輪寺に着きます。境内に立つのは、一つの根株から7本の幹がまっすぐ天に向かって伸びる珍しい松、七本松です。滋賀県などに分布するウツクシマツの一種で、いつ誰が植えたのかは定かではありませんが、代々の住職に見守られながら、地域のシンボルとして大切にされています。

転輪寺からさらに数分歩くと、田園の

傍らに「聖徳井戸」があります。柏野の地はかつて東大寺の荘園で、ここで収穫した米を柘植川から木津川、淀川を経て奈良まで舟で運んだと伝わります。「下りは川を舟で下り、上りは大和街道沿いを牛に舟を曳かせたそうです」との話を、今も静かに語り継がれています。井戸の水でこの一帯の水田を潤したという逸話は、今も静かに語り継がれています。川沿いにはかつて御代・物堂・上市場などの市場が並び、集落が発展してきたといい、旧大和街道と柘植川沿いを歩くと、その名残を感じることができます。

名医のふるさと「橋本病院跡」と「橋本酒造場」

「聖徳井戸」から国道25号線を越え、旧大和街道沿いをたどって向かうのは橋本策博士ゆかりの地です。明治から昭和にかけて活躍し、甲状腺の病氣「橋本病」に名を残した世界的な医学者で、大正5（1916）年には家業を継いで橋本病院を開院しました。かつての病院の跡地には、現在蔵が一棟残るのみですが、「お寺の近くに移築できないか、今も検討を続けています」とのこと。県内外

から多くの患者が訪れ、分け隔てなく診療にあたった逸話も語り継がれています。橋本博士の功績は、地元研究者・川崎記者先生の著書にもまとめられており、地域では今もその足跡をたどる取り組みが続いています。

続いて向かうのは「橋本酒造場」。かつて6軒あった旧伊賀町域の酒蔵で、唯一残る蔵元です。清酒「俳聖芭蕉」は全国新酒鑑評会で連続金賞を受賞。「夫婦二人で仕込める量しか造っていないので、伊賀市内でのみ販売しています」と、橋本勝誠さん。純米吟醸は冷やして、常

温やロックでも楽しめる甘口のお酒で、地元の人々にも親しまれています。仕込みの様子の見学や試飲も、事前に相談すれば対応可能とのこと。

「弓の的が残した地名」的場古墳

酒造場を後に、駅へと戻る田んぼ道の中にある的場古墳。現在は畑地となっているこの小高い塚は、佐々木氏城跡から弓の稽古の的にしたと伝えられています。「あんな遠くからいくつ打っても届くわけないやけどね」と、ほほ笑む奥澤さん。田んぼの中の小山を遠く静か

に眺めながら、「新堂」駅へと戻ります。歴史と信仰、そして地域とともに歩んできた産業の物語が詰まった新堂駅周辺。駅前の「SHINDO YARDS」では、2026年秋にはワイナリーに続きレストランとホテルの開業も予定され、散策後に立ち寄る楽しみも増えそうです。また、10月末には地元主催の「歴史ウォーク」も予定されており、家族連れでも楽しめる新たな散策スポットとして注目されています。

問「西柘植地域まちづくり協議会」

TEL 0595-45-8611



「橋本病院跡」にある蔵



夫婦で営む「橋本酒造場」
清酒「俳聖芭蕉」



新酒鑑評会での受賞歴も



田んぼの中にこんもりと佇む的場古墳